

第三十九章
脱出

立派な服の大家が田中のアパートからマンションに戻った途端、中国からリングラングが戻ってきた。

「ごまかし続けるとツケが回ると言うが、まさしく中国は大混乱じゃ」

「田中さんのテレビと同じテレビが中国に溢れていて汚職の現場が次々と生放送されていたわ」
「オレンジ社の製品を中国で生産したいがために、ステイブ・ゲイツの提案を無条件で呑んだのがそもその原因じゃ」

「ステイブ・ゲイツは始めこのテレビを日本で製造するつもりだったわ。しかし、人件費が高いので技術移転してタイで製造しようとしたけれど水害で頓挫しました。日本を凌駕した技術力を持つ韓国での製造も考えましたが、韓国のメーカー自体がオレンジ社のjフォン、jパッド・オレのライバルでした。結局、中国に技術移転するが製品の内容に口を挟まないという条件で生産委託することになりました」

「おい！ リングラング。お前、いつからニュースキャスターになったんじゃ？」

「ああく思い出したわ。パパ〜」

「何か、取って付けたようなセリフじゃ。以前のようにはじけるような色気がない」

「そうかしら。だったらハジケましようか。パパ〜」

「今ははじけないでくれ。続きの報告を聞きたい」

「でも、ここのテレビは田中さんがいないと電源が入らないんでしょ」

第三十九章 脱出

「そうじゃ。どうもボロア・パートでないとダメなようじゃ」

「じゃあくア・パートに行きましょう」

「あのテレビ、中国では有り余るほどあるんじやろ」

「ええ」

「一台でいいから持って帰ることはできなかったのか」

「それは絶対無理だわ」

「なぜじゃ」

「中国の恥を映すテレビだから輸出禁止。それに製造も中止なの」

「そんなことしてもいずればれる」

「恥を嫌う中国人は先のことなど考えないわ。あのテレビを見た人も長い目で自分の国の将来を考えようとはしません」

「それは日本も同じじゃ」

「人間の性さがです」

「リングラング！」

立派な服の大家が叫ぶとリングラングが一步離れる。

「パ。パ。 どうしたの？」

「お前は本当にリングラングか？」

「そうよ」

リングラングが赤いワンピースを脱ぎかける。

「やめる！ お前はリングラングじゃない」

「パ。パ！」

*

「随分スマートになってる」

田中が驚いてリングラングを見つめる。

『「わずか一週間で十キロも減量」ってなダイエット広告に出演できるぞ」

「茶化さないで」

いつものリングラングではないのを承知の上で立派な服の大家が再度迫る。

「いったい何が起こったのじゃ」

「もう日本でも中国で起こった数々の大事件が報道されているでしょ」

「まったく情報がない。中国のインターネットサイトにもアクセスできない」

「でもこのテレビなら中国の現状が分かるんでしょ？」

田中、山本、質素な服の大家がリングラングに首を振る。そして立派な服の大家が答える。

「わしはマンションに帰っていたから何も知らん」

続けて田中が派手なリングラングに首を傾げる。

「よくも出国できたもんだ。しかもそんな派手な赤いワンピース姿で」

「中国では赤が一番安全色です」

「あつ、そうか」

「それに賄賂社会です。お金さえあれば何とでもなるわ」

「それで何とか出国できたのか」

「中国で起きた数々の大事件がこのテレビでどのように報道されてたの？」

「それはお前の方がよく知っているじゃろ」

「もちろん、このテレビと同じ性能を持つオレンジ社のテレビで見るに堪えない映像を見ました。でもそれはほんの一部だわ」

「急に政府がこのテレビを回収したもんな。それにオレンジ社の工場を占拠した」

「オレンジ社の工場長はチェンの計らいでアメリカに亡命したわ」

*

「総書記の力でもいかんともしがたい。ここは逃げるしかない」

チェンが高速鉄道衝突事件から行動を共にしてきたオレンジ社の工場長に告げる。

「私を恨む検察官シューが反撃に出た」

「逆恨みか。私も自分の命は可愛い。どうすればいいのですか」

「国連に行く。私は中国では海軍大佐に過ぎないが国連の実務総長だ」

「存じております」

「中国はこのままでは崩壊するかも知れない」

「総書記は大丈夫でしょうか」

チェンが目を閉じる。自分を抜擢してくれた総書記を守らなければならないと思うが、海軍大佐に過ぎないチェンにとって動員できる兵士の数は知れている。

「すまない」

チェンが自分を信じて付いてきた部下のことを思い出して声を詰まらせる。

「ここは……ここは恥を忍んで逃げるしかない」

工場長は気持ちを察するとチェンの手を握って一言だけ発する。

「急ぎましょう」

チェンは目をかっつと見開くと工場長の手を握り直して部下に指示する。

「一番ぼろい車を用意しろ」

「えー？」

「その車で私と工場長は潜水艦基地に向かう。お前たちは政府の高級車でシユーを攪乱してくれ」

「待ってください。海面下降で潜水艦基地は小高い山の中腹にあります」

「承知している。漁船を借りて沖に停泊している潜水艦に向かう」

「潜水艦で国連まで向かうのですか」

「お前たちを信用しているが、これ以上のことは聞かないでくれ」
「分かりました」

日頃から面倒見のいいチェンに部下たちが敬礼すると部屋を出る。その後を追ってチェンと工場長も部屋を出る。

*

今にもエンストしそうな中国製の中古車でひなびた港のずーっと彼方にある海辺に到着するとチェンと工場長は小屋に飛びこむ。年老いた漁師がチェンにうやうやしく頭を下げると外へ出て粗末な小舟に案内する。

「エンジン付きのゴムボートを待機させていると聞いたが」

「盗まれました。わしが手漕ぎで沖の潜水艦まで案内します。ただし、乗員はあなたひとりということに……」

「いや、ふたりだ」

チェンが先に小屋を出る。

「幸い、海は穏やかだ。頼む」

「分かりました。やむを得ません」

チェンと工場長は何の疑いも持たずに小舟に乗る。漁師が櫂かいを握るとギイギイという音と

もに沖合の潜水艦に向かう。その間、チェンは特殊携帯通信機で次々と連絡を取るが使用言語はすべて英語だった。

ようやく潜水艦にたどり着くと小舟にロープが投げられる。そのロープをたぐり寄せてチェン、工場長、漁師の順番で甲板に移る。

「ご苦労だった」

まずチェンは漁師をねぎらう。しかし、漁師はチェンの視線を外すように顔を背ける。チェンの視線はすでに甲板にいる潜水艦の乗務員に移っていた。

「世話になる」

乗務員の敬礼を受けてハッチにチェンが足を踏み入れる。続いて工場長と漁師が入る。

「チェン大佐」

聞き覚えのある声が潜水艦の司令所に響く。

「シュー！」

「チェン、お前も甘いな」

武器所持のチェックが終わるとチェンが周りを見渡す。

「部下であるはずの海軍兵士が私を裏切ったのか」

「察しだけは早いな」

いきなりシューがチェンの顔を力一杯殴る。そしてもんどり打って倒れたチェンの脇腹を

踏みつける。

「国連ではなく死刑台に連れて行ってやる。この売国奴が！ 出航！」

漁師が満面の笑みをたたえてシューに申し出る。

「私は戻ります。お約束のご褒美を」

「褒美は北京に着いてからだ」

「約束が……」

「心配するな。約束は守る。お前に法廷で発言してもらわなければならない。その発言にも褒美が与えられる」

「そんな」

「ここで死にたいか」

「わ、分かりました」

シューは足元でもがくチェンにツバを掛ける。

「十二分に借りを返してもらおう。覚悟しろ」

*

「間もなく魚釣り島（尖閣諸島）付近に到達します」

「何！ 北京に行けと言ったはずだぞ」

シューの後ろにチェンが立っている。

「ここまでだ。お前の出番は」

「どういうことだ」

「拘束しろ」

先ほどまでシューの命令にしたがっていた乗務員がシューに手錠を掛ける。

「潜望鏡深度まで浮上」

艦内の前方が少し上向きになる。手錠を掛けられたシューがチェンを睨む。

「出世しか考えないお前など慕う者はいない。それに海軍の兵士がお前に従うなんておかしいとなぜ気付かなかった？」

シューは黙ったままうなだれる。それはチェンに暴力を加えた報復を恐れたからだ。

「俺をどうするんだ。俺には……」

チェンがシューの言葉を退ける。

「アメリカに連れて行って中国の現状を披露してもらおう。それがこの作戦の目的の一つだ」
シューだけでなく誰もが驚く。

「俺は何もしやべらない」

「しゃべらなくてもあのテレビの映像がお前に迫る」

「？」

「お前の行動のすべてが映像化されている」

「まさか」

「あのテレビの恐ろしさを一番始めに目の当たりにしたのはシュー、お前だろ」
シューが黙る。

「今から言い訳を考えておくことだな」

チエンはこれ以上相手にする必要がないと判断して艦長に命令する。

「監禁しろ」

「分かりました」

艦長が部下にシューを監禁するよう命令するとチエンに向き合う。

「チエン大佐。あなたの作戦がよく分かりません」

「そうだな。私には説明する義務があるな」

「いえ、そんな大げさなことではありません」

「いや。皆さんにはかなり心配を掛けた。今からお詫びをかねてこれからのこと説明する」

狭い潜水艦の司令所でチエンが艦長に向き合う。

「まず、シュー。アイツが中国国内にいると様々な問題を引き起こす。だから私自身をおとりに
してこの潜水艦に誘い出した。このままアメリカまで連れて行く」

「さつきシューに言っていたのは冗談ではなく本当なんですか？ 本当に我々はアメリカに向かうのですか？」

「そうだ。正確に言うとなアメリカではなく国連に向かう。最も私は途中下船して先に国連に向かうが……」

艦長が驚く。

「ちよつと待ってください。今、国内は大混乱に陥っています……」

今度はチェンが遮る。

「海面降下で海軍は役に立たない。その昔、北朝鮮の体制が崩壊して難民が中国に押しよせるのではと危惧した時代があった」

艦長以下、司令所にいる誰もが黙って耳を傾ける。

「今や政権の中枢にいる者や富豪層はこれまでの不正があのにテレビで暴かれて北朝鮮やベトナムに亡命するかも知れない。そして地続きになった台湾やフィリピンやインドネシアにも」

「しかし、台湾やフィリピン、インドネシアは我が海軍が……どう言えばいいのか……」

「分かっている。領有権を争って我が海軍は強引に彼らの主張を退けた」

「はっきりとおっしゃいますな」

艦長が恐縮する。

「日本ともそうだ。尖閣諸島も本土から泳いで行けなくもない。ただし、尖閣諸島はリゾート地ではない。住民は山羊だ」

思わず艦長が苦笑する。

「我が総書記は有能な方だ。何とか事態を收拾するはずだ。そのためにもシューを隔離する必要があったのだ」

「大佐は下級官吏のシューを買いかぶっているのでは？」

「彼のバックにはマフィアが付いている。だから彼は無茶苦茶なことができる」

「それは知りませんでした」

「秘密高等検察庁の次長は更迭されたがすぐ息を吹き返した。そして私を標的にした」

操舵士が戸惑いながら報告する。

「潜望鏡深度まで浮上しました」

「洋上の監視艦五五〇号の艦長を呼びだせ」

「監視艦五五〇の艦長が応答しました」

「私は中国海軍大佐のチェンだ。今や大きな島に変身した魚釣り島の近辺は我々が監視する。

すぐこの海域から離れて本土に一番近い港に戻れ」

「私どもは海軍の指揮下におりません」

「こう言えば納得するだろう。遭難した漁師を救助した。その漁師を本国に送り届ける。これは海洋監視艦の本来の任務だ」

「了解しました」

チェンが艦長に向かってニヤツと笑う。

「監視艦の艦長は意外と素直なヤツだな」

「艦長。浮上だ」

「了解」

*

漁師を乗せたゴムボートが監視艦に向かう。艦橋からゴムボートを見送りながらチェンは特殊無線機で鈴木に連絡を取る。その鈴木から期待通りの明るい報告を受ける。

「準備ができた。大型水上飛行艇がそちらに向かっている。正確な位置を打電してくれ」
「分かった。通信士に打電させる。使用周波数を教えてくれ」

チェンは航続距離の長い飛行艇でニューヨークに自分を送り届ける作戦だと確信する。しかし、速度が遅い飛行艇では一日近くかかるだろうと、その間に何をすべきか考える。しかもニューヨークも今や海辺の都市ではない。大型の飛行艇なら滑走路を離着陸する車輪を装備していない可能性が高い。

「心配するな。数時間でニューヨークに送り届ける。それよりも中国の内政が心配だ」

「数日あれば落ち着きを取り戻すはずだ」

「それならいいが」

そのとき、超低空で中国空軍機が近づいてくる。チェンと一緒に艦橋にいた艦長の目の前のスピーカーから悲鳴のような声がする。

「艦長！ シューを解放しなければ攻撃すると空軍機からの連絡が入りました」

「急速潜航！ 空軍機は何機だ？」

「二機です」

「対空ミサイル発射準備」

「空軍機に攻撃を仕掛けるのですか？」

艦長とチェンはその声を無視して艦橋のハッチから司令所に降りる。ハッチが自動的に閉まると艦橋に波が迫る。

「空軍機からミサイルが！」

司令所に下りるハシゴで艦長がその悲鳴を聞く。

「あつ、近くに潜水艦が！ そ、その潜水艦から発射音！ 魚雷ではありません」

「なに！ 国籍を確認しろ」

「これは……」

「なんだ？」

「国籍不明」

「味方ではないことだけは確かだ。対空ミサイル及び魚雷発射を急げ」

艦長はなすすべもなく狼狽える。チェンも覚悟を決める。

「潜望鏡深度まで潜航。急速潜航継続中」

「何かに掴まれ！」

かなり近いところで爆発音が聞こえる。潜水艦が激しく揺れるが水漏れはない。

「レーダーブイの準備完了」

「発射！」

「潜水艦はグレーデッドです。距離三三〇〇」

「近いぞ。魚雷発射はまだか」

「空からは友軍であるはずの戦闘機、海中ではグレーデッド潜水艦」

チェンが独り言のように小声を出したあと大声で叫ぶ。

「ここに日本の飛行艇が来るぞ」

艦長はチェンの言葉に反応することなく命令を発する。

「グレーデッドの潜水艦の補足を急げ」

「艦長！ 先に空軍機を始末するんだ。グレーデッドを無視しろ」

チェンが叫ぶ。確かにグレーデッドの潜水艦は至近距離にいなながらチェンの潜水艦を攻撃していない。

「レーダーブイ、探索開始。機影二」

「グレーデッドから海中通信が」

「通信回路を開け」

「中国海軍の原子力潜水艦に告ぐ。先ほど中国空軍機から発射されたミサイルは核ミサイルだった。もちろん我々が迎撃した」

「何を言いたい」

応答したのはチェンだった。

「もう一機いる。核ミサイルは搭載していない」

チェンが絶句する。グレーデッドの驚くべき科学技術水準の高さに驚いたのだ。

「艦長！ 魚雷発射は自重してくれ」

「拒否する」

「確認してくれ。海上の飛行物体を」

「一機は戦闘機。もう一機はかなり大きなものです。機影からして大型の飛行艇です」

「その飛行艇と連絡は取れるか」

「待ってください。急速潜航継続中です」

「急速潜航停止。急速浮上しろ」

チェンは納得するが、足場が急に変化したので転んでしまう。

「大丈夫ですか」

潜望鏡を掴んでいた艦長がチェンに手を差しのべる。

「まるでジェットコースターみたいだ」

それほど潜水艦の急潜航、急浮上が床の角度を急変させる。

「しかし、なぜグレーデッドが本艦を助けたのか」

「そのうち分かると思うが、グレーデッドの構成員は被曝者らしい」

「間もなく潜望鏡深度。このまま浮上しますか」

「浮上停止。潜望鏡上げー」

艦長が潜望鏡を押し上げて海面を見つめる。

「あつ、飛行艇が見える」

「戦闘機は？」

艦長が潜望鏡をぐるぐる回す。

「レーダーでも確認不能」

「グレーデッドの潜水艦に撃墜されたのか、それとも燃料が少なくなって帰国したのかも知れない」

「浮上」

*

浮上した潜水艦のすぐそばに飛行艇が着水している。その背中には高速戦闘機が搭載されている。ちょうどジャンボ旅客機の背中にスペースシャトルを載せているような感じだ。

「グレーデッドの潜水艦は？」

第三十九章 脱出

「離れていきます」

「変な借りを作ったな」

チェンが艦長を見つめる。

「それにしても我が潜水艦に核ミサイルを使用するとは」

「グレーデッドの言うとおりでとすればだ。しかし、われらに攻撃することなく去ったとすれば信憑性は高い」

「空軍はなぜ本艦を核ミサイルで攻撃しようとしたんだ」

「空軍ではない」

「？」

「今の政府の転覆を狙う者の仕業だ」

艦長が再び疑問符だけをチェンに向ける。

「シユーを影で操っている集団だ」

「人民解放軍の中に不穏な集団がいるのか」

「買収したのだろ」

「まるで背後から撃たれるようなものだ」

「残念ながら、あのテレビがその不穏な分子をあぶり出したようだ」

「今回の攻撃の目的は？」

「目的はふたつ考えられる。ひとつはシューを葬ることだ」

「本艦がシューを連れてアメリカに行くのを防ぐためか」

「そうだ。口封じだ」

「ふたつ目は？」

「私だ」

「国連実務総長の暗殺？」

チエンが頷きながら応える。

「この海面降下で混乱した世界で国益を無視して地球のために尽力を注ぐ私は反逆者に見えるのかも知れない」

「たったふたりの命を奪うために核ミサイルを使うなんて！」

「我々の内情が次々と暴露されている」

「旧尖閣列島を含む海域には日本の海上自衛隊だけではなく、アメリカ海軍の潜水艦が展開している」

「海洋監視艦はもちろん中国海軍も展開している」

「関係ない」

「現政権を倒して自らの正当性を守るためには人民解放軍の一部を買収して強硬手段に訴えるなど朝飯前だ」

「チェン」

艦長がゴムボートに乗り込むチェンに哀願する。

「私は誰の命令に服従すればいいのですか」

「総書記だ」

「直接命令されることはありません」

ゴムボートが離れる。

「中国人としてでなく地球人としての良心に従ってくれ。当面の任務はシユーを連れて国連に向かうことだ」

「分かりました。命に代えても」

*

飛行艇が舞い上がる。機体を風上に向けると四機あるエンジンが全開する。爆音が最高潮に達すると背中 of 戦闘機のツイジェットエンジンが火を噴く。その炎が永い尾を引くと飛行艇から離れる。すぐに音速に達したのか、ドーンという音が海面を叩く。

「チェン。私はあなたにこの命を預ける」

艦長が小さくなって見えなくなるまでチェンが搭乗しているはずの戦闘機に敬礼を続ける。

そして艦橋から司令所に降りるとよくとおった声で命令する。

「潜航！ 全速前進！」

第三十九章 脱出

第四十章
腹を割る

「人口が多すぎる。国土が広すぎる。このふたつが中国の歴史であり現状です」

国連の議場でチェンと鈴木が議題の趣旨説明を交互に行う。

「歴史上、中国以外にこのふたつの『すぎる』と言う環境を何千年にも渡って経験した国はないでしょう」

「中国が膨らんだり萎んだりするたびに世界の歴史が変化しました」

「他の国やその周辺国の動きで歴史が揺れ動いたのも事実ですが、中国のそれと比べれば規模がまったく違います」

国連で鈴木がチェンとともに中国が周辺国に与える影響の大きさを訴える。

「アメリカの盗聴事件。ロシアのエネルギーを盾にした周辺国への圧力。そして両国の他国への軍事介入。大国の横暴は数えれば切りがないでしょう」

「この両国には中国ほどの長い歴史はありません。特にアメリカは」

「中国はアヘン戦争を機に列強各国の侵略で崩壊しました。多難な時代を経て何とか統一政府が樹立されたものの経済的に立ち直るまでに何十年もかかりましたが、この数十年を顧みると中国ほど急成長した国はないでしょう。眠っていた竜が目覚めたのです」

「気が付けば十三億とも十五億とも言われる人口を擁した巨大国家が猛スピードで走り出した」

「象の大群が走るとまるで地震のようだという話を聞いたことはありませんか？ まさしく中

国という象が大地を疾走しています」

「しかし、人口では四分の一か五分の一に過ぎないアメリカの景気に翻弄されています。さらに中国から見ればユーロという小国の集合体の景気にも左右されています」

「新興国も急速に発展しています。まさしく地球の経済は大きな変化の渦の中をめまぐるしく移動しています」

「一方、かつての先進国には閉塞感がまん延しています」

「そして海面下降という地球環境の急変が追い打ちをかけました。太平洋の島国や日本、フィリピン、インドネシアなどの領土が拡大しました」

「今まで砂漠だったところに巨大な湖が出現しました」

「このような環境の激変には一国だけの力ではどうしようもありません」

「湖の海水が溢れて大河となって故郷の大海に戻ろうとしますが、川の氾濫が流域の国々に塩害をもたらします」

「海面が下がるつど過去の国境線が意味を持たないどころか、紛争が絶えません」

「ここでふたりは間を置く。そしてチェンが続ける。」

「今こそ中国の出番です。そして大人として振る舞う必要があります。まさしく中国という竜が脱皮できるのか、どうか。これが今回のテーマです」

「まず、中国の周辺国ではアメリカやユーロより中国に期待しています」

「ところが甘えようとする子供に親は体罰で対応しているように見えます」

その周辺国の国連大使が頷き出すと中国の大使が立ち上がる。

「異議あり！」

「まだ、提案事項の説明中です。静粛にお願いします」

「我が国を愚弄するにもほどがある」

チェンが制する。

「私は中国人です。全世界から尊敬される中国人になりたいのです」

「！」

チェンの迫力に圧倒されて中国の大使が席に着く。チェンがほっとした表情を浮かべたとき、その大使が再び立ち上がると無言で出口に向かう。

「待つてください！」

チェンが大声をあげると演台から降りる。

「大人の対応じゃない！」

チェンの言葉に中国の国連は歩幅を広げて半ば逃げるように姿を消す。仕方なく演台に戻るとチェンは静まりかえった議場に深々と頭を下げる。

「議事の進行に不手際がありました。お詫び申しあげるとともに招集責任者としてこのまま議事を進行してよいのか、ご意見を伺いたいと思います」

そしてチェンは振り返って事務総長を見つめる。事務総長は目の前のマイクに向かって簡潔に述べる。

「実務総長のチェンに議事進行の不手際があれば私の責任です。不手際だと判断した各国大使は手元の採決ボタンを押してください」

この採決は無記名投票を意味する。演台の後方上部のモニターに「1」という数字が現れる。鈴木がほっとして議場を見渡すとチェンは残念そうに頭を下げる。

「ありがとうございました。しかし、尊厳ある父親になるチャンスを中国は放棄した。残念ではありません」

うなだれるチェンを見つめながら北朝鮮の国連大使が薄ら笑いを浮かべるのを横目に鈴木が慰めるような声を出す。

「折角、世界中が中国の実力を認めて父親に推薦しているのに」

「むしろ、息子の日本の方が大人として対応している」

チェンが応えると鈴木が笑い飛ばす。

「そうだろうか。雷オヤジを恐れて顔色を窺っているとしたか思えない」

直ちに日本の大使が手を上げようとするが自重する。

「雷オヤジ？」

挙手もせずはどこかの大使が尋ねる。

「何かにつけてすぐに大声で怒鳴りつける父親のことだ」

鈴木が応答すると他の国の大使が手を上げる。

「今日は雷を落とさずに静かに消えたぞ」

前代未聞のこの発言に議場が爆笑に包まれる。

「静粛に！ 静粛に！」

チェンと鈴木が大声をあげると議場全体が大きな拍手に包まれる。まるでスタンディングオベーションのようだ。ふたりの後ろに座っていた事務総長も拍手をしながら立ち上がってマイクの前に進む。

「皆さん！ 思い切り笑って、思い切り手を叩いてください」

事務総長がチェンと鈴木に向かって強く手を打つ。つられてチェンも鈴木も大きな拍手をマイクに向けて打つ。北朝鮮を除くどこの国の大使も負けじと手を打ち続けるとついに北朝鮮の大使もごちなく拍手する。両隣の大使が近い方の手で北朝鮮の大使の肩を叩いて微笑みかける。全員から「おお」という驚きの声が上がると笑い声が広がる。そして事務総長が大きく頷きながらマイクに向かって叫ぶ。

「皆さん！ ネクタイを外しましょう」

チェンと鈴木が驚いて事務総長を見つめる。

「これでいいんだ。チェン！ ビールを用意してくれ」

「えー？」

「中国のビールがいい」

演台に何人かの大使の声が届く。

「異議なし！ 異議なし！」

*

議場の外では各国の報道関係者が中国の国連大使を取り囲む。

「事務総長が中国のビールを注文したのは本当ですか？」

「からかうのはよせ！」

大使が血相を変えて記者団を振り切ろうとするが多勢に無勢だ。突然、画面の端に山本がマイク、いやビール瓶を持って現れる。

「山本さんだ！」

田中が叫ぶと大家が山本を探そうと前屈みになってテレビを見つめる。

「さっきまでここにいたのに。どうなっているんだ」

山本が取り囲む記者や中国大使の側近をスルスルと通りぬけて大使に近づく。

「あっ！ 大使にささやいている」

山本がにこやかに大使の耳のそばで何か言っているがよく聞こえない。田中が画面の山本の口元にタッチすると声が届く。

「みんなで乾杯しましょう」

山本が瓶ビールを中国大使の手に押しつける。そんな山本を大使が不思議そうに見つめる。
「中国ビールを宣伝するビッグチャンスだわ」

まるで催眠術に掛かったように大使は瓶ビールを受け取ると向きを変える。

「議場に戻るぞ」

大使が側近に告げると山本が叫ぶ。

「通路を開けてください！」

田中が手を叩く。

「おもしろいことになってきた」

大家もはしゃぎ出すと反応するかのように山本が高い声を出す。

「皆さんも議場で乾杯しましょう」

完全に山本のペースになる。大使の顔から緊張感が消えると山本にエスコートされて議場の入り口に向かう。その山本はスマホで酒屋に連絡を取る。

「至急、滅茶苦茶冷えた中国ビールを千ダース、国連に配達してください！」

*

中国の国連大使が現れると瓶ビールを高々と上げる。一瞬静まりかえるが、爆発したような拍手が起こる。チェンが駆けよって壇上に導く。すべての大使が立ち上がると拍手が収れんし

て一定のリズムを刻み始める。チェンが両腕を高々と振りながら行進すると大使も真似をする。慌てて側近が瓶ビールを取りあげる。

チェンとともに大使が壇上に上がると再び拍手が起きる。チェンが何度も頭を下げる。いつの間にか鈴木も事務総長も並んで深々と礼をすると笑顔で議場を見渡す。

「誰がこんなショーを企画したんだ？」

事務総長が鈴木に尋ねるが、その声さえ聞こえないぐらい議場が興奮の渦に包まれている。もう一度事務総長が尋ねると鈴木が大声を出す。

「中国ビールを注文したのは事務総長でしょ！」

「だが、一本ではひとり、ひとしずくしか当たらないぞ」

そのとき山本がビールを満載した台車を押して議場に現れる。すかさず鈴木が叫ぶ。

「この素晴らしい大騒動を仕掛けた犯人が現れました！」

山本のあとを何台もの台車を押して入場する国連職員が続く。反対側のドアが開くとグラスを持った職員が素速く各大使の机にグラスを置いていく。

「国連が酒場になる」

事務総長が腹を抱えて笑う。

「飲む前から、みんな酔っている」

鈴木が異様な雰囲気呑まれてしまう。ポンポンポンという音とともに隣同士で相手のグラ

スにビールを注ぎあう。そして全大使がグラスを高々と上げる。事務総長が中国大使のグラスにビールを注ぐと大使は事務総長に、そしていつの間にかグラスを手にしたチェン、鈴木にもビールを注ぐ。だが鈴木グラスには少ししか注がれない。瓶ビールが空になったのだ。すかさず山本が中国大使に新しい瓶ビールを手渡す。

「ありがとう」

中国大使はすぐさま鈴木にそして山本が手にしたグラスにも注ぐ。

「乾杯を！」

山本が催促すると中国大使が首を横に大きく振って山本を直視する。

「あなたが乾杯の音頭を取ってください」

躊躇することなく山本が腕を伸ばすと叫ぶ。

「カンパーイ！」

「乾杯！ 乾杯」

そのあと「ゴクゴク」という音が響きわたる。グラスを机に置く音がしたあと大きな拍手がとどろく。事務総長もグラスを演題に置いて議場を見渡す。

「いいかな」

すべての大使が着席する音が響くとキツとした静粛な雰囲気が変わる。

「これまでの若いふたりの実務総長の至らぬ言葉に不快感があったとしたら私の指導不足です。

しかし、これまでの報告に落ち度はないし、すべての国連大使は黙って耳を傾けていた」

ここで事務総長が座ると中国大使に演題前に座るよう目配せする。大使は近くにいるチェンと鈴木を和やかに見つめてからマイクに口を近づける。

「我が中国はまさしく大人です。そしてこの場で中国の代表を務める私も感情に左右されることなく皆さんの期待を裏切らない受け答えをする大人です」

そして一瞬強面の表情に変えて続ける。

「しかし、わがままばかり言う子供には体罰も必要です」

この言葉に議場の酔いが覚めて静寂に覆われる、そしてチェンががっかりして涙を流す。

「泣くな！ 見苦しいぞ。実務総長」

そう言うとは今度は大笑いする。

「我が国は昔、仏教の国だった。自分の身を律さなければ、立派な親とは言えない。ましてや子供に体罰を加えるなどもつてのほかだ。それに体罰は禁止されている」

急に拍手が起こる。

「腹を割りましょう」

チェンが中国大使に近づくと抱きしめる。

「分かった。分かった……」

急に中国大使の目から涙が流れると逆にチェンを抱きしめる。

第四十章 腹を割る

第四十一章
エネルギーウエーブ

「あんなに各国がグレーデッドの脅威や原子力発電所のリスクを議論したのに、日本の電力会社のあの態度は？」

例のテレビの前で田中が憤る。いつもは画面の縁が広いのにほんの数ミリ残しただけの全面モードで映像が流れる。場所はメルトダウンした原子力発電所が立地する県庁の知事室前で、その部屋から出てきた電力会社の社長にインタビュする山本を取り囲むように報道関係者が群がっている。社長を見つめる者のなかにはその電力会社の副社長や専務もいる。しかし、その表情に緊張感はない。田中がそのふたりの上に指を置くと副社長と専務の会話が聞こえてくる。

「昔はこういう場合大概副社長や専務が報道陣に囲まれてもみくちやになったもんだが、今はトップが応じないと印象が悪くなるので、社長が矢面に立たなければならなくなった」

「そうですね。お陰で随分楽になった」

「俺は社長になりたくない。このままずーと副社長のままがいい」

副社長の言葉に専務の口元も緩む。

「同感です。社長のストレス解消の叱責を受ける方が楽ですね」

「でも、今の社長は可哀想だ」

急に副社長が神妙になる。

「どうしてですか」

「社長は専務時代も副社長時代も常に会社の不祥事が起こったときに謝罪役をやらされた」

「あつそうか。今度は副社長や専務にその役をさせようにも自分がしなければならなくなった」

「だから、社長にはなりたくない。ナンバーツーが一番居心地がいい」

「そうかな。社長のストレス解消は副社長に向かいますよ」

「今日は筆頭副社長が、他の諮問会議に出席しているから私はここにいるが、五人いる副社長のなかでもやはりナンバーツーが一番居心地がいいのだ」

「なるほど！ 私はナンバースリー副社長を目指して頑張ります」

苦笑しながらナンバーツー副社長が話題を変える。

「しかし、知事の言葉は辛辣だったな」

「知事はまったく分かっていますね」

「原子力発電所の地元では再稼働に賛成する住民が多いのに」

「しかし、周辺の自治体の反発は分かりますが、原発から遠いほど住民の反発がすごいのは驚いた」

「選挙が近いから、知事が俺たちを利用して宣伝しているんだ」

「いずれにしても円安で高くなった原油や液体ガスに頼った火力発電所で発電すれば電気料金を値上げせざるを得ない。値上げを避けろと言うのなら二酸化炭素の排出量が多い石炭発電の比率を上げなければならない」

「値上げすれば住民はもちろんのこと企業も音をあげる。石炭使用量を増やせば政府も困るだろう」

「まあ、長期戦だ。それまでひたすら社長に頭を下げてもらうしかない」

聞くに堪えない会話が続く。ようやく解放された社長がそのふたりに近づく。ボディガード役の社員とともに副社長と専務が社長を取り囲む。

「待ってください。逃げるんですか！」

山本の声がする。

「電力料金の値上げを恐れて原発の再稼働を容認する声上がるのを見越して、再稼働申請をするなんて卑怯だわ」

「幾ら何でもその発言は無礼だ！」

社長が反論する。

「電力の安定供給という御旗を武器に国民を脅迫しているのを許すことはできません」

「脅迫しているのはどちらだ」

「私が社長にインタビューしている間に廊下の隅で副社長と専務が怪しげな会話をしていたのを私が知らないとしても？」

「そんなこと、あるはずがない。我々は電力の安定供給だけを使命に努力するだけだ」

そのとき副社長と専務の会話がどこからともなく再現される。

「盗聴されていたのか！」

狼狽える副社長と専務をいきなり社長が殴る。副社長と専務の会話内容に驚きながらも報道関係者が慌てて社長を羽交い締めにする。

「暴力は止めてください」

大騒動に気付いたのか部屋から知事が出てくると目元を腫らす副社長と唇を切って血を流す専務に気付く。

「何が起こったんだ？」

すぐさま事情を察知した知事がまだ羽交い締めの社長に向かって大声をあげる。

「会社としての体裁をなしていない。今から上京して政府に電力会社を国有化するように提案する」

*

「国連で決まったんでしょ。どの国も電力供給組織はすべて国有化すると」

知事の言葉に環境大臣が首を横に振る。

「国連決議に拘束力はありません」

「…」

「無視すると言っているではありません。国連の提案には夢があります。太陽エネルギーを取り込む巨大宇宙ステーションを建造してそのエネルギーを地球に送るといふ壮大な計画に興

味があります。でもそれまでどうするのかという現実を無視する訳にはいきません。それに事故を起こした海辺の福島原発は今や海面降下で内陸部に位置してます。他の原発も同じです。もはや津波を受けることはない」

「直下型の地震にはどう対処するんですか。それに無責任な電力会社に電力供給を任せるのはいかななものか」

「そんなことはない。彼らは電力を安定供給するプロ集団です」

「違う！ 電力会社は国民に対してではなく、自分たちの組織を安定状態に保とうとするいかかわしい集団です。電力会社の重役の暴言を大臣は報道やインターネットで確認していないのですか！」

「報告は受けている」

「何を言ってるんですか。国内だけでなく世界中の人が見てたんですよ」

大臣は知事の言葉に一瞬沈黙するが冷静に対応する。

「後でビデオを確認しましたが、あまりにも脚色がひどい報道でした」

「私は目の前で目撃した。脚色など一切ない。私も映っていた。本当にビデオを見たのなら現場に居合わせた私にそんな発言はできないはず」

大臣がたじろぐとすぐさま知事が詰めよる。

「本当にあの映像を見たんですか。昨日の夕方の出来事ですよ」

そのとき、大臣室のドアが開いて男がふたり、テレビを持って入ってくる。

「誰だ！ 誰の許可を得て……」

「これか。故障したテレビは。古いなあ」

ふたりはテレビの裏側のコードを手際よく取り外すと持ってきたテレビに接続する。

大臣は慌てて机の上のインターホンを押すが反応がない。部屋を出ようとする大臣の腕を男が取る。

「待ってください。ちゃんと映るか確認してください」

男は笑っているが腕を握る力は強い。思わず大臣はその男の視線を外す。

「どうでしょうか」

テレビの画面に映像が流れる。その映像を見た知事が驚く。昨日の知事室前で起こった映像が流れているのだ。

「大臣！ 見てください」

知事に促されて大臣が映像を見つめる。

「この映像を見たとおっしゃるのなら、この次は」

「……」

「やっぱり見ていないのですね」

「急なことに……」

必死に取り繕うとする大臣に向かって知事が怒鳴る。

「嘘つき大臣！」

大臣も怒鳴った知事もふたりの男がもういないことに気付かない。それどころかいつも間にか山本がカメラをふたりに向けて立っていることにも気付かない。テレビから視線を外した大臣が気も狂わさんばかりにわめく。

「誰があいつらの入室を許可した！」

そのとき大臣秘書官が部屋に入ってくる。

「大臣が許可されたとおりにしました。いったい、どうされたのですか」

大臣がわなわなと床にへたり込む。

「大臣！」

山本がカメラをバッグにしまおうと知事の手を引く。

「悲しい特ダネだわ」

「いや、未来に繋がる素晴らしい特ダネだ」

知事が神妙に山本を見つめる。

「あの国連で全会一致の決議があったあと、議場に現れたスミス財団のスミス氏がたたえたノロという人物がこれから先の地球の運命を握っていると確信している。無理を承知で尋ねます。ノロという人物に直接会いたいのだが、この願い、かないますか？」

「その気持ちは分かります。でもノロではなくエネルギーウエーブが本当に可能なのか……」
知事が遮る。

「私がノロに会って聞きたいのはどのようなようにすればどれぐらいの期間にエネルギーウエーブで全人類を救えるのかだ」

「ノロに会えなくても私が答えることが出来ます」

「！」

山本が耳打ちをすると手を携えてふたりは大臣室から消える。

*

「原子力発電を推進するフランスが協議に応じるなんて！」

田中が叫ぶとテレビ画面にフランス大統領のダレモオランゾが現れる。

「ドイツが太陽光発電などの自然エネルギーを国内に普及させるまで不足分を補うため、我が国の原子力発電所で発電した電力を供給してきました。今度は自然エネルギー網が普及したドイツから電力支援を受けます」

山本がマイクを向ける。

「そのあと原発をどうするのですか」

「先輩ドイツに廃炉技術を教授していただきます」

いつの間にかドイツのメリケン首相がダレモオランゾ大統領の横に立っている。

「我がドイツは福島原子力発電所の事故を教訓にそれまでの廃炉計画を加速させました。事故を起こしていない原子力発電所の廃炉作業は意外と簡単でした。一方、最高水準のエネルギー交換率を誇る日本の太陽光パネルを大量導入して自然エネルギー発電に転換しました。その間、電力の不足分をフランスの原子力発電所に頼りました」

メリケン首相にダレモオランゾ大統領が笑顔で応える。

「今度はドイツに助けてもらう番です。しかし……」

ダレモオランゾ大統領が含みを持たせるとメリケン首相が微笑む。

「……太陽光パネルは使いません」

ここでテレビを見ていた田中や大家が叫ぶ。

「えー！」

「国連の決議を実行に移します」

「フランスには大型打ち上げロケット、アリエンがあります。もちろんこのロケットはフランス、ドイツ、イギリスが中心となって開発したユーロのロケットですが、これを使って国連で決議されたエネルギーウエーブ作戦の一翼を担うことにしました」

「この場にいませんがイギリスのヤメロン首相も国連決議に従ってエネルギーウエーブ作戦の協議に参加することに賛成です」

山本が踏み込む。

「巨大な宇宙ステーションを建設してから太陽エネルギーを電磁波に変換して地球に送るのですね。本当に実現可能なのでしょうか」

「すでに基礎研究は完了しています」

メリケン首相が胸を張る。すかさずダレモオランズ大統領が追従する。

「この件については、ミス山本、あなたの方が詳しい」

そしてメリケン首相が山本を厳しく見つめる。

「あなたはいったい何者？」

*

「アメリカはスペースシャトルを復活させるそうだ」

以前より大型化されたスペースシャトルの勇姿が画面に現れる。

「単なる復活じゃないわ。第二世代のスペースシャトルを建造すると明言しているわ」

山本の声が映像のバックで流れる。

「ロシアも大型ロケット、ソユーズで参加を表明したぞ」

「まあ、アメリカとロシアの参加は当然として、いち早く中国も参加を表明したのには驚いたな」

田中と大家がテレビを見ながら話し合う。

「アメリカ、ロシア、中国、フランス、ドイツ、イギリスの六カ国がエネルギーウエーブ協議

会を発足させて協力しようとしているのに日本は何をしておるんじや」

「スピード感を持って政策を推し進めていくと言っているが、まるで三輪車で子供が走っているようなものですね」

「スピード感を持っているだけではダメだ。自ら走らなければ」

「なぜ走らないんだろ」

画面が変わると笑顔の山本がふたりに声をかける。

「廃炉にするどころか、電力料金が上がると企業が困るとか、国民が文句を言うとか、理屈をこねていますが、政治家は電力会社から莫大な献金を貰っていたから強いことが言えないのです。それに官僚の天下り先でもありません。この両者はこともあろうか事故を起こしたのに日本の原発技術は世界一だと宣伝までしています」

ここで画面から山本が消えて国連の実務総長で忙しい鈴木一佐に代わって第一党の党首である阿倍野が首相として中東産油国を歴訪する画面に変わる。

「我が国は東北大地震にともない福島原発が水素爆発を起こして甚大なる被害を受けました。

しかし、原発事故で死亡した者はひとりもいません。ましてや被曝もありません」

そのとき女性記者の叫び声が聞こえる。なんと、またまた山本だ！

「福島原子力発電所の所長や所員が被曝で亡くなりました。このことを首相は無視されるのですか。それに原発事故の風評被害で自殺したり……」

首相が割りこむ。

「無視などしておりません。大変なご苦勞をかけたと認識しています。しかし、彼らは電力会社の社員です。いわゆる殉職でこれは関東電力の守備範囲です」

「まるで野球で打球を処理するのは選手で、エラーをしても監督の責任ではないというような弁解ですね」

「たとえ話は止めてください」

すかさず山本が突っ込む。

「たとえ話かどうかはこの国の人が決めることです。それとも私のインタビューが日本株式会社の営業妨害だとしても」

「だから、たとえ話は……」

そのときアラブ産油国の報道関係者が口々に山本を支持しながら質問する。

「私たち報道関係者は国民に分かりやすく伝えなければならぬ使命を持っています。これは先進国の首脳から絶えず指導されています。もちろん日本政府からも」

安倍野首相が青ざめて言葉を失う。

「我々中東諸国は有り余る資金を保有しています。しかし、アメリカやロシヤ、それに最近是中国、昔はイギリスやフランスやドイツ、どこもこの中東諸国に介入してきました。日本はどのようなことはしていません。そこで我々は日本に『なるほど』と、思わず飛びつきたい提案

を期待しているのです。その点について首相はどうお考えですか」

首相が即答しないので記者たちは山本を見つめる。

「なぜ私に視線を向けるんですか」

アラブの記者には砕けた者もいる。

「美人だから」

阿倍野首相を除いて会場に笑い声が起こる。

「ありがとうございます」

そして山本は茶目っ気たっぷりに言葉を続ける。

「私、この仕事、やめます。女優になります。応援してください」

一気に記者会見場が爆笑に包まれる。

「記者は真実を伝えるのが仕事です。予断を介入させてはなりません。つまり真実をねじ曲げて世論を誘導することは許されません。でも女優になればこう言えるかも知れないわ」

この会見場にいるのはアラブの報道関係者だけではない。六カ国協議に参加する国々はもちろんのこと、他の国々の政府関係者もいる。日本の首相の考えを注目しているのだ。つまり高度な技術力を持つ日本の出方を探っているのだ。未だ日本は協議に参加する意思表示すら表明していない。それどころか中国を含む現在の六カ国協議に参加することに躊躇している。そのときある記者から衝撃的な言葉が発せられる。

「韓国が参加表明をしました」

歓声が上がるとすべての視線が安倍野首相に向けられる。

「いったん持ち帰って国民の総意を見極めて前向きに検討したいと思います」

どこかの国の記者が驚いて挙手もせずに質問する。

「国民の意思を確認せずにこの時期になぜここへ来られたのですか」

「私が申し上げているのは六カ国協議に参加するの点かという点について国民的議論がされていないということです」

誰もがあ然として首相を見つめる。違う記者が大声を出す。

「我が社の日本支局の情報ではマスコミ各社が参加云々について連日メディアを通じて報道していることですが、首相は新聞やテレビを見ないのでですか」

「もちろん存じております。しかし……」

山本が首相の言葉を遮る。

「それなら改めてお尋ねしますが、原子力発電所の設備、技術を中東諸国やインド、旧東欧諸国に輸出セールスをするために各国を歴訪するというのは国民的議論を経て、あるいは国民の総意を汲んでのことなのですか！」

首相が思わず天を仰ぐ。

「すごい女優が誕生したぞ！」

アラブの記者のひとりが叫ぶと居合わせた記者全員が山本に割れんばかりの拍手を送る。

*

「結局日本が参加表明して新六カ国協議会が発足したな」

田中が呟くとテレビの電源が切れる。

「人口の多い新興国が参加表明したが、ロケットの打ち上げ技術がない国は除外されたのう」

大家が息を吐きながら言葉を結ぶ。

「でもロケット打ち上げ技術を持つ北朝鮮も参加表明したが拒否された」

「他にも技術を持った国があったが、断られたぞ」

「参加国が多くなると規格のすりあわせが大変なんだろうな」

「インドと中国については準参加国に格下げされた。インドの首相は素直に受け入れ、オブザ

ーバー参加を歓迎したが、中国の首相は激怒した」

「それは表面上のことじゃないかなあ」

「？」

「アメリカ、ユーロ、それにロシアのロケットの規格はそれまでの宇宙ステーション事業ですりあわせができていたから、一緒に作業するのに問題はなかったんでしょう。でも中国の規格はまったく違っていたんでは？ 僕はそう思うんですが」

「なるほど。それで文句を言いながらもオブザーバーの地位で妥協したのか」

「それにしてもメリケン首相とダレモオランゾ首相のコンビの息はぴったり合っていた」

田中の言葉に大家も頷く。

「あのふたり、どのようにして安倍野首相の首を縦に振らせたんだろ」

「山本さんが助言したんじゃない？」

結局、アメリカ、ロシア、フランス、ドイツ、イギリス、日本の六カ国協議体が結成されて中国と韓国とインドがオプザーバー参加になった。地球のはるか上空に巨大な宇宙ステーションを建設して、太陽光を取り込んで造りだしたエネルギーを電磁波に変換して地球に届けるといふ壮大な計画が実現に向けて一歩踏みだした。

それまでエネルギーと言えば争奪対象で戦争の原因だったが、今回の方針で脱原子力に大きく舵を切ることになった。各国の首脳が本当の意味で自国民だけではなく、人類すべての生存に向けて明るい未来に向かって歩き始めた。

第四十一章 エネルギーウエーブ

第四十二章
春は来ないが夏も冬もなく、
秋しかない国

「なんだかんだと言っても日本は戦後約百年近くも大過なく歴史を刻んできた」

「最近大規模な戦争はないが、アラブの春とか、つまりクーデターや内戦や紛争が多いぞ」
テレビの電源が入ると激しい空爆の映像が現れる。

「？ ……ベトナム戦争？」

「大家さんの言うとおりです」

テレビから逆田の声が返ってくると大家が真剣な眼差しで画面を眺める。

「アメリカは空母を展開して世界中で戦争を起こしてきた」

「これはどうです？」

逆田が大家に尋ねる。

「アフガン？」

「ロシア、いえ旧ソ連のアフガニスタンへの侵攻です。アメリカも同じことをしました」

「ソ連はチェコの首都プラハにも侵攻したな」

田中は大家と逆田の会話を聞くだけで視線をテレビに固定する。

「これはどうです」

砂漠を戦車が猛スピードで縦隊を組んで走っている。

「これは知っている。イラク戦争だ」

田中が声を上げる。

「アメリカを中心としたイギリス、フランス、ドイツなどの多国籍軍がイラクの首都バクダットを陥落させた」

画面が変わる。しかし、田中はもちろん大家も首を捻る。

「これは中国のベトナム侵攻です。そしてチベット併合……」

逆田のため息が漏れる。

「そして印パ紛争」

大家が逆田に代わって解説する。

「インドとパキスタンの紛争！ お互い核兵器を盾に激しいつばぜり合いをした。核戦争を始めるのかと世界中が固唾を飲んで心配した紛争だ」

逆田が続ける。

「そして韓国は北朝鮮と休戦中です」

「休戦中？」

田中が首を傾げると大家が応じる。

「いつ戦闘が始まってもおかしくない状況にあるということだ」

田中が傾げた首をしゃきっとさせる。

「北朝鮮は核兵器を持っている！」

映像が消えると逆田が現れる。

「六カ国プラス三の協議国のうち絶えず平和を維持してきた国は日本だけです。島国で単一族だから自己完結型のシステムが形成されたのです」

「待ってください」

田中が横槍を入れる。

「イギリスもそうじゃないか」

画面に島国だった頃のイギリスの地図が示される。

「イギリスは昔、大英帝国と呼ばれて、陽が沈むことがない国と言われました」

アルゼンチンに占領されたフォークランド島（今は南アメリカと陸続きになっている）を奪回しようとするイギリス海軍の激しい攻撃の映像が流れる。

「皇太子も一兵卒として空母に乗り込んで戦いました。領土を守るといふ執念の戦争でもありました」

「僕は昔のイギリスが日本と同じように島国だったと言いたかったです」

再びイギリス本国の地図が現れる。

「大きい方の島はイギリスの領土ですが、小さい方はアイルランドと二分されています」

「イギリスとアイルランドとはよく揉めていたぞ」

大家が思い出すと逆田が応じる。

「今は認めあっていますが、過去を引きずっています。いずれにしても日本ほど平穏な国はあ

りません」

「そうだな。一致団結しているようには見えないけれど一応仲良く暮らしている」

震災時のボランティア活動画面に変わる。

「今回の東日本大震災では国民は肃々と対応した。政府の対応は後手後手に回ったが、全国民が東北地方のために一致団結した」

「すごいことなんだ！」

「国民は政府を信用せずに行動します。しかも秩序を維持しながら黙々と行動します」

「なんだか変な国だな。日本は」

「始めに『アラブの春』と申し上げましたが、独裁政治に終止符が打たれて民主国家になったという点でこの『春』という言葉は非常に適切な表現です」

「春ということはそれまでは劣悪な治世下に置かれていたということだ」

大家の言葉に促されたのか、画面はガンジーやマンデラといった著名な反政府勢力の指導者の迫害場面になると大家が呟く。

「冬の時代だ」

無抵抗な指導者を力一杯殴りつけるシーンに田中や大家が思わず目を背ける。

「日本も戦前は平和を求める国民に同じようなことをした。ましてや侵略したアジア諸国民にも同じようなことをした」

目を背けるふたりに反応して画面は若者が軍隊に投石する映像が流れる。

「国を変えようと若者が燃えました」

逆田の声に目を開くとテレビには戦車の前で両手を大きく広げて立ちほだかる若者が映っている。戦車が速度を落とさずにその若者に近づく。若者は逃げない。それどころか逆に戦車に向かつて歩き出す。思わず田中が目を閉じる。画面では戦車が若者の手前で急停車する。大家が田中の肩を軽く叩く。

「大丈夫だ」

ここで画面が変わる。若者が戦車や装甲車それに兵士に向かつて火炎瓶や石を投げつける。炎に包まれた兵士が道路に転がりながら必死で火を消そうとする。それを見た他の兵士が布のようなもので火だるまの仲間をたたきつける。

「どこの国なんだ」

田中の疑問に応えることなく画面では異変が起こる。忍耐の限界を超えた一部の兵士が若者に向けて自動小銃の引き金を引く。まさか銃撃されるとは思っていなかったのか何十人もの若者が頭や腹から大量の血を流して倒れる。恐れることなくすぐさま助けに向かう若い女性を追い越して、同じく若い男がシャツを脱ぎすてて上半身裸の姿で両手を高々と上げて自動小銃を構える兵士に向かつて走り出す。

びっしよりと汗をかけた田中が再び目を背ける。大家もビデオだと分かっているにもかかわらず

叫ぶ。

「逃げる！」

*

「抵抗の暑い夏！」

夢から覚めたように田中が叫ぶ。

「田中さん」

大家在床に伏した田中の頬を軽く叩く。

「大家さん」

田中が起きあがると冷蔵庫に向かう。ペットボトルを取り出すとそのまま口をつけて飲む。

「ワシにも」

慌てて田中は直立に近かった。ペットボトルの角度を下げる。そしてゴボゴボと音をたてる。ペ

ットボトルを大家に手渡す。

「厳しい冬。それを耐え忍んだサクラが咲く春。そして燃える真っ赤な夏」

元氣を取り戻した田中が言葉を繋ぐと大家在引き継ぐ。

「冬、春、夏と来たが、秋というのはどんなもんじゃ？」

「秋か……いい季節ですね。春もいいですが、秋は花粉症もないし……」

「田中さんの言うとおりに春もいいけれど、秋は落ち着いておるのう。確かに春は百花爛漫らんまんの美

しい季節で生に充ち満ちている。でも秋は勢いよく咲く花はないが、赤や黄色や緑の絨毯に包まれた山々に魅了される」

「冬ごもりですね」

ここで急に山本が登場する。

「秋という季節は冬ごもりして春を迎える準備期間だわ」

「でも秋には春と違う渋い彩りがあるぞ」

大家が反論する。そのとき田中が今までの映像や議論を通じて自分なりの答えを出す。

「循環しない、止まった秋があるとすれば、今の日本がそうなのか」

すぐ山本が頷く。

「確かに動いていないわ。今の日本」

*

立派な服の大家がアパートのドアを開けると田中と質素な服の大家にいきなりしゃべり出す。

「最近、税務署はとても親切になったな」

質素な服の大家が同調する。

「確かに」

「でもおかしな税金が多いわ」

にぎやかにになった部屋に山本がテレビから出てくる。

「いつ見ても不思議なテレビじゃ」

「おかしい税金って？」

田中が目の前の山本に尋ねる。

「特別復興税」

「東日本大震災の被害に遭った東北地方の復興に充てるための税金のことじゃ」

「それには大賛成だけど、相変わらず復興とは関係ないところにも税金が使われている」

田中が憤慨すると質素な服の大家が続く。

「復興庁という役所は復興を邪魔する役所だ」

「復興庁の役人を監視すべきその復興庁の長官自身が暴言を吐いておるぞ」

「原子力発電所の事故で死んだ者はひとりもないという発言のことですね」

「放射能の風評被害で牛乳や野菜が売れなくなって自殺した被災者がいるのに」

「直接の原因で死者がでなければ大したことはないと言っても言いたいのか」

「政治家は国民の気持ちを汲んで対策を打たなければならん。しかし、どう見ても納得できないところに予算を使っているのによくもシャーシャーと言ったもんじゃ」

「長官は事実は事実だとしばらく自説を撤回しなかったのう」

両大家の発言がかみ合うと山本が苦笑する。

「外遊先で同じことを言って世界中からひんしゆくを買った首相がたしなめると長官はしゅんとして謝ったわ」

「情けないのう」

「それは選挙が近いからじゃ」

田中が反応する。

「政治家は自分の発言に責任を持つべきなのに、庶民から見ればとても理解できない発言が多い」

「そう言えば最近の橋本市長も歯切れが悪い」

市長を応援していた立派な服の大家が残念がる。

「以前の橋本市長なら、不用意な発言をしてもすぐ全面的に撤回して頭を下げたもんじゃ」

「奢りが出てきた。権力というのは魔物だ」

「このままではファンが消えるわね。残念だわ」

一同頷きながら黙ってしまふ。

*

「何の話をしていたんだっけ」

「特別復興税の話だ」

「使い道はともかく、おかしなシステムなの」

「？」

両大家と田中が首を傾げる。するとテレビに逆田が現れる。

「復興税を納める期間が法人税と所得税では月とスッポンほど違います」

山本は頷くが、三人は首を傾げたままだ。

「会社、つまり法人はその期間が二年間です。ところが個人事業者やサラリーマンは二十五年間です」

「えー！ 滅茶苦茶不公平だ」

田中が叫ぶ。

「なぜじゃ！」

「ただし、法人税の特別復興税の税率は10パーセント。個人の所得税のそれは2パーセントです」

「おかしい！」

田中が再び叫ぶ。

「確かに法人特別復興税の課税期間は短いが税率は五倍だ」

「でも二十五年ですよ。2パーセントに二十五年をかけるとなんと50パーセントですよ。それに比べて法人税の方は10パーセントかける二年で20パーセント。どう考えても不公平だ」

田中が電卓を置いて「どうだ」という表情で両大家を見つめる。テレビの中では逆田が田中

に領きながら解説を始める。

「それだけではありません。山本がシステムと表現したのは深い意味があつてのことです」
そして山本に引き継ぐ。

「まず、田中さんの計算自体は間違つていないのですが、大きな誤解があります」

「えっ！」

山本が田中の電卓に手を当てる。

「個人の場合、税率が10パーセントとすれば、10パーセントに2パーセントかけた0・2パーセントが本来の特別復興税の税率です。本税の（10％）と復興税（0・2％）のトータルで10・2パーセントです。個人の場合の税率は累進課税と言つて所得が多くなればその税率が上がっていきます。累進課税なので税金の計算が複雑ですが、それを無視して単純に説明すればこうなります。20パーセントだと20・4パーセント。最高の45パーセントなら46パーセントになります」

山本が電卓のボタンを押す。

「次に会社の場合はどうです。黒字であれば納めなければならない法人税を計算します。たとえばそれが百円だとしましょう。この百円に法人の特別復興税率10パーセントをかけます。答えは十円ですね。都合百十円です。会社の規模などで法人税率も何種類かありますが、20パーセントぐらいです。大企業なら約30パーセントです」

「個人より低いような気がする。人間じゃなく法人として生まれるべきだったかもしれない。質素な服の大家に田中が苦笑する。山本は無視して説明を続ける。」

「20パーセントに10パーセントをかけると2パーセント。つまり税率は本税の（20%）と復興税（2%）の合計22パーセントです。30パーセントでも33パーセントです。赤字法人が多く中小企業が多いので少し乱暴ですが法人税率を20パーセントとしても余り問題はないでしょう」

田中が電卓を取り返す。

「個人も会社も納めなければならぬ税金の税率を20パーセントとして計算した結果、それがどちらも千円だとすれば、個人の場合はその2パーセントだから20円、会社の場合はその10パーセントだから100円。個人は二五年間納めなければならぬから20円かける25年で500円。会社は100円かける2年で200円」

「なんと！」

両大家が合唱して驚く。

「法人税の特別復興税の課税期間は二年。方や個人の場合は二五年も続く！ どう考えても減茶苦茶不公平だ！」

「しかも会社は赤字を十年間繰り越せます。つまり過去の赤字を今の黒字から差し引きできるのです。法人税の特別復興税は通常納めなければならぬ法人税の10パーセントですが、黒

字でも過去の赤字と相殺してその結果、所得がゼロになれば特別復興税もゼロです。最近の円安で景気のいい会社が多くなりましたが、不景気の時の赤字と、つまり十年前の赤字とも相殺できるので、特別復興税の適用期間は二年間ですから、まったく納めなくてもいい会社が結構あるかも知れません。でもこのことについて政府は何も伝えません」

「サラリーマンは？ 給料が上がらなくて家計がズーと赤字なら同じでは」
田中が突っ込む。

「給料には給与所得控除という経費が認められていますが、赤字になることはありません。生活費は給料を稼ぐための経費ではないので家計が赤字になっても繰り越すことができる損失ではないのです」

「わしのような個人事業者は？」

質素な服の大家が身を乗りだす。

「個人事業者の場合の赤字は三年しか繰り越せません」

「十年と三年では差別以外の何ものでもないな」

「言い忘れましたが、会社も個人事業者も青色申告書を提出する場合にしかこの赤字、損失の繰り越しは認められません」

「青色申告？」

「そんな色の申告書、見たことないぞ」

「そうすると、最低、特別復興税の法人の課税期間が二年なら個人の場合十年にしなれば不公平じゃ」

「賛成！ 東北地方の人のために10パーセント余分に二年間税金を払うのは我慢する！」

田中が胸を張る。

「田中さんは収入があるのか」

質素な服の大家が半目で田中を見つめる。田中がはっとしてうつむく。

「あつ！ 僕は失業中だった」

しかし、すぐ頭を上げる。

「でも四分の三以上の法人が赤字なんですよ。僕は赤字じゃない」

田中に山本が微笑むが、すぐ真剣な眼差しに戻す。

「皆さん。もっと重要なことがこの特別復興税のシステムに隠されているのに気付きませんか？」

「うーん」

田中はもちろんのこと両大家も頭を捻る。

「二十五年。これがヒントです」

「分かった！」

*

田中が手を打つ。

「政府は復興に二十五年かけるつもりなんだ。できるだけ早く復興させるべきなのに！」

「そのとおりじゃ！ 特別復興税の正体はダラダラ税金だ、復興だと言って集めた税金を他に使おうとしておるのじゃ」

「国民も何年か経つと何のために余分な税金を払っているのか分からなくなるぞ」

「東日本大震災のことも知らない今年生まれた子供が高校を卒業して働き出したとき貰う給料袋の明細書を見て首を傾げるだろう」

「田中さんの言うとおりだわ。でも給料袋なんて、田中さんも古い人間ね」

「あっそうか。今は振込の時代だ」

「変な突っ込みをしてごめんなさい。でも確かに『特別復興税』と書かれて天引きされる給与明細書を見てその税金を理解するのはまず不可能ね」

「生まれる前に決められた法律に縛られてしまうのか」

田中がやりきれない表情をすると立派な服の大家が叫ぶ。

「これは年金問題と一緒にじゃ！ 長い年月を掛けて国民を欺くひどい税金だ！ 国家がその場凌ぎで最もらしいことを言って取り敢えず国民を納得させたあと、長い時間をかけて国民を忘却の彼方に迷いこませてから『そんなことありましたっけ』と惚ける」

質素な服の大家も負けていない。

「これは国債と一緒だ。国債を乱発しておいて『借金を何とかしなければ』とわめいて増税しようとする。増税したって借金の返済に回すことはない」

「そのとおりです。仮にこの特別復興税に原子力発電所の廃炉費用が織り込まれているとすれば、別の方法で対処すべきでしょう。果たして事故を起こした原子力発電所の廃炉は二五年でできるのでしょうか。消費税は上げる。個人には二十五間も特別復興税をかける。法人は二年間だけ。しかも法人税率を下げた法人が元気になるれば景気がよくなると言いますが、利益を出す勢いがあるのはほとんど大企業で、中小企業、特に最高税率45パーセントの適用を受ける個人事業者には恩典はありません。ましてや日本は社会主義国家ではありません。力ある大企業が儲けた利益で社員の給料を上げるか、配当を多くするか、貯金に励むかはその企業の自由です。もし利益の使い道を押しつけるのならその政権党は本家の共産党のお株を奪うことになります」

逆田はこう言うとテレビの画面から消える。

第四十二章 春は来ないが夏も冬もなく、秋しかない国